



號 月 正



第二卷 第一號

目次

年改まる	別所梅之助 (一)
禁苑の春	石田幹之助 (二)
古寫本の興味	永見徳太郎 (四)
ジュウル・ロマンと「善意の人々」	高見裕二 (六)
マキアヴェルリとの一騎打	多賀善彦 (二)
日本の科學	菊池正士 (四)
晩秋の鐘	小竹無二雄 (六)
丸本のことなど	豊竹古靱太夫 (八)
嘉村磯多の倫理と郷土	松村泰太郎 (六)
ブック・レビュー	
文學の宿命	平岡昇 (三)
バルザック	水野亮 (四)
良書推薦	諸家 (三)
後記	(元)

装幀・カット 青山二郎

年改まる

別所梅之助

春に明けてまづ見る書も天地の始の時と讀みいづるかな
 といふ橘曙覧の歌は心地よい。かくお正月の讀書はじめに、古事記を讀む人は、また、「元始に神、天地をつくり給へり」といふ創世紀にも、ゆかしき古人の想を學べよう。

今の曆は春で始まつてゐない。一月は季節の上で冬である。随つて年が改まつてからの方が寒氣も強い。それでも心から大きく見ゆる初日かな 一 茶

冬の氣壓配置では、アジア大陸の氣壓高くして、太平洋上の氣壓が低い。水のみか空氣とて、高さより低きへと流れゆく。それで日本の冬は北西風が吹き荒ぶ。ひびも切れる、あかきれも切れる。

稻つけばかがる吾が手を今宵もか殿の若子がとりてなげかむ
 萬葉の昔からかういつて田舎少女は、輝の手を蓋づかしく思つた。

その代り一、二月の山は、言はん方なく美しい。もとより「あえか」などいふ美しさでない、嚴しい、おそろしい美しさである。若い友はこの冬休を劍のものと小舎で過すといふ。零下十五度の寒氣は凌げようが、雪のわざはひなかれと念ぜられる。野の霜も美しく恐ろしい。霜は小さい木だと根を上げてしまふ。氷は橋の脚を上げる。それで木も枯れ、橋もいたむ。野の鶯の初音は、九州ですら二月に入らねば聞けない。それを人は籠に飼うて、夜飼をする。そしてお正月に初音をきく。北から南へと長い日本、春の來るのは、均しからう筈はない。

それでも我らの同胞は、年の神様——お正月様を迎ふるとて、年男が常磐樹を山から里へと移す。この樹は松を最も多しとすれど、處によつては檜なるものあり、樺なるものあり、榎なるものもある。箱根も仙石あたりで年を迎へた人は、門松の松ならぬに心づくであらう。神はこの樹によりて降りたまふと思はれた。クリスマスツリーと相通ふおもひであらう。

除夜の鐘の鳴るままに、雪沓つけて元朝まゐりに、お社さしてゆく若者、一番鶏のなくのを合圖に、若水を汲む年男、敬虔なおもひが下に流れてゐよう。お正月も十日から十五日へかけての小正月の行事は、わけて賑々しかつたらしい。子どもをする粥釣、若者がさしづする左義長、田の神もお祭り申すし、土籠打もする。農業の國日本の人々は、年の豊かならん事を偏に念じたものであらう。

(創元社版「朝のおもひ」より) 定價一・八〇



禁苑の春曉

石田幹之助

銀燭 天に朝して 紫陌長し、
 禁城の春色 曉 蒼蒼。
 千條の弱柳 青瑣に垂れ、
 百轉の流鶯 建章を遶る。
 劍佩の聲は 玉墀の歩に隨ひ、
 衣冠の身は 御爐の香を惹く。
 共に浴す 恩波 鳳池の上、
 朝朝 翰を染めて君王に侍す。

賈至「早く大明宮に朝す。(兩省の僚友に呈す)」

唐都長安の春は正月元旦群卿百寮の朝賀と共に立つ。この日早曉、文武の百官は宮中の正殿大明宮に參朝して訂盟各國の使臣と共に皇帝の萬歳を唱へる。こゝに引いた玄宗・肅宗二朝の中書舍人賈至の七律はその光景を詠んだものであるが、元朝參

賀の際としては春色稍と深きに過ぎるものあるを覺えるが、それは固より詩人の技巧であらう。

支那では古來天子未明に朝を視るのが習はしで、有司みな毎朝曉暗を衝いて禁城に朝する。元朝賈至の折とても同様である。銀燭なほ煌々として紫陌を照らし、天なほ爽味、「禁城の春色、曉、蒼々」たる所以である。宮苑千條の揚柳の枝が連瑣紋を青く描ける宮門を撫で、流鶯百轉、諸宮を遶つて啼く。建章は漢の宮名であるが借りて唐の皇宮を指すことは云ふまでもない。參朝の公卿・將星は大禮服に威儀を正し、劍佩聲は憂々として玉階を歩するに隨つて鳴り、衣裳冠纓、みな殿上に薫ずる伽羅の移り香に匂ふ。鳳凰池は中書省を指す雅語で、終末の二句、朝々翰を染めて詔令を草する作者賈至の身邊を語つたものである。

賈至がこの詩を呈した「兩省の僚友」が誰であるか明記してないが、之に和した七律が王右丞(摩詰)並に岑嘉州(參)に

それぞれ一首ある所から察するに少くもこの二人がそのうちにあつたことは確であらう。王右丞の詩「賈至舍人の『早く大明宮に朝す』の作に和す」には

絳幘の雞人 曉籌をり、
 尙衣 方に進む 翠雲の裘。
 九天の闕闕 宮殿を開き、
 萬國の衣冠 冕旒を拜す。
 日色 纔に仙掌に臨んで動き、
 香烟 哀龍に傍うて浮ばんと欲す。
 朝罷んで 須く裁すべし五色の詔、
 珮聲歸り 到る 鳳池の頭。

とあり、岑參の同題の一首には

雞 紫陌に鳴いて 曙光寒く、
 鶯 皇州に轉じて 春色闌なり。
 金闕の曉鐘 萬戸を開き、
 玉階の仙仗 千官を擁す。
 花、劍佩を迎へて星初めて落ち、
 柳、旌旗を拂つて露未だ乾かず。
 獨り鳳皇池上の客あり、
 陽春の一曲 和すること皆難し。

とあり。

「絳幘の雞人」は雞冠を象れる赤衣を纏つた衛士で、宮漏を計つて朱雀門外に曉を報する。「曉籌を送る」は「報す」に作

るが、「送る」とすれば籌(即ち時刻を示す木札)を傳送することとなり、「報す」とすれば漏刻の籌(即ち時至れば浮び出づる筋)を見て曙色動くを知らすこととなる。何れに解するも意は通ずる。「尙衣」は御衣を司る官、その翠雲の裘を進むるに及んで天門開け群臣入つて天子を拜する。拜畢る頃、日漸く出で、承露盤上の金莖・仙掌を照らし、曉風微にそよいで香烟煙に散じ、御衣の傍に搖曳する。末句は千官、朝罷んで退くも中書の官人はなほ省に歸りて詔書起草の事に従ふを指し、賈至の身上を云つてゐる。(冕旒は天子の冠に垂るゝ飾り、「五色の詔」は諸説あるも五色の紙を交へて詔を書くの故と解すべきであらう。制詰ではないが、五色の紙を繼いで物を書くこと正倉院御物に存する光明皇后の御書「杜家立成」等に徴すべきものがある)。

岑參の詩は、雞鳴が京師の街衢に曉を告げて春寒なほ料峭、而も鶯鶯やがて賑に轉じて春色皇州(帝京)に普く、「金闕の曉鐘」につれて街中の諸鼓皆動き、坊巷の萬戸徐に目醒むる頃は百官悉く廷前を埋め、玉階の下、兩列の儀仗群卿を擁して寂として聲がない。宮苑の花が朝士の劍佩を迎へる時、星光漸く微にして天外に没し、柳條は廷下の旌旗を拂ふも朝露なほ濕りて日はまだ顯はれない。唐都長安の空に浮く春曉の色、漸く帝宮の甍に映ゆる趣きを詠じ盡して餘蘊なきを覺える。「鳳皇池上の客は」賈至を意味し、その作を賞して「和すること難し」と云つたのである。

* 筆者は國際文化振興會職員、日本大學教授



古寫本の興味

永見徳太郎

今更言ひたてることでもなからうが、古寫本に私は興味の魅力を感じ謝して居る。古寫本と言つても、自分の、専攻的な對外資料の範圍内である。上質の美濃紙にお家流の墨墨々としたのを、一字／＼讀んでゆく気分もたまらないのである。たとへ書きつゞられたのが、泰西智識であつても、古風な漢字や萬葉假名、そのもの内から、當時驚異に價ひする文明開化が、夜明前みたひに、蒙昧な帳を拂ひ除くやうである。

活字印刷には活字の美しさが漂ふのであるが、古寫本には又其の筆技の面白さがある。殊に良き古文字を靜かに精讀する時は、有難いと思ふ。然し、誰にも筆癖といふ自己流があるから、如何に流麗美文でも、筆達者になると、難解な字句に見かけられる。幸ひ長文だとすれば、何處かに同じ文字が重ねて發見されるから、前後の意味で大體の見當か或は的中になつたりする。楷書だと分りやすい事無論ではあるが、草・行書の走書

だと、能筆の妙趣は湧いても、スラ／＼と讀めない。然し、其に首を傾げ、字書を繕いて研究するのも樂しみな一つであらう。だが、現代人と過去の文書、を考ふるときどれだけのそれに對する智識が有らうか。案外、古寫本の醍醐實を知つてゐる者は尠ないやうである。學校教育に草行書を記憶する時間が僅かで讀めない。古ぼけた黴臭い物は手にする機會が薄い。一讀するに面倒で六ヶ敷しいなどといふ點も、古文字嫌いになる理由らしい。いやしくも學問を志す以上、其等は問題でなからう。茨の路を通らねば目的地に達しないとすれば、シツカリ踏みつけて前進すべきだ。

古寫本や古文書は、大衆向の活字本にならざるのが多い。新研究などゝされるのは、その古いのに、こぼれた種が見出される。落ちて居るのである。コッ／＼と學ぶ研究には、其等が主體となつたりする。こゝには、文久二年の「諸事書上扣帳

寄合町」の記録一冊より少し拾つて、回顧すると共に、新體制時の現在と、對照する參考にもなる事件をあげてみやう。寄合町は丸山町と一所に丸山と呼ばれた長崎港の遊里地である。言はゞ引用するのは花街舊記だが、傾城關係のみと思つたら誤りも甚しい。あらゆるニュースが含まれて居るから、益々、古文字は大切である。

於養生所に来十五日々辰戌之日毎うゑ痘瘡致施行遺候
間痘瘡前之小兒有之ものは正九ツ時を八ツ時迄之内養生所
へ連越相願可申候右者引請人におよばず直に罷出可申候

右之趣市中一統不洩様可相觸候

成 二月

養生所とは日本最初の病院で、小島郷に建てられて居た。阿蘭陀流醫術の普及された所、日、蘭兩國旗が懸つてゐたのであつた。種痘術が、約八十年前の長崎に、一般化なつてゐたのである。當時の衛生思想が分つてくる。

文體、文字、讀方よみかたに關しては時代色があつて、其々の變化がつきまとふ。例へば文字では、更紗を血紗けくさ、外科を外料けりょう、和蘭を紅毛べんぼう又は阿蘭陀あらんた、和蘭陀わらんた、ジャガタラを咬嚼吧くわくば或は咬嚼吧くわくば等。

舶來品は珍奇であつたから、外人の靴紛失でさへも、重要視されたらしい。

私儀遊女買揚に罷越候異國人沓紛失いたし候始末御吟味に御座候

此段申上候當二月廿八日私方江遊女買揚に罷越候異國人江附添候筑前無宿源市儀右異國人腕捨置候沓取候由に而被召捕今般私儀被召出右始末御札を請候得共同日は異國人數人落合致之外及混雜同人共何れも酌酮いたし追々歸候譯にて沓紛失いたし候譯申聞も不致勿論源市參り居候譯會而不心付且異國人名前茂相辨不申候

右御札に付少茂相違不申上候

寄合町

遊女屋

富三郎代

元 太

郎

今度は、榎本武揚等の海軍記事を取上やう。

御小姓組

小栗豊後守組

御軍艦組出役

内田恒次郎

小普請組

柴田能登守支配

圓兵衛次男

榎本釜次郎

奥火之番

太八郎伴

同

澤 太郎左衛門

御先手

三浦美作守組與力

吉澤源次郎弟

同

赤松大三郎

久世大和守家來

同

田口俊平

松平三河守家來

藩所調所出役教授手傳

津田眞一郎

堀田傳之充家來

佐波銀次郎厄介

西 周 助
諸職人八九人

右者今般和蘭陀國へ御詔蒸氣船壹艘制作中諸桁爲研究被差遣候に付威鯨丸に乗組當月上旬江戸出帆いたし當港着船之上異船便に而出帆いたし候旨申來候間爲心得相違候

成 六月

歴史學の指導者は、古文書尊重を説きて、後進者に、興趣深い事實をも、力説して慾しい。なほざりにすると、何時の世にかは、紙反古同様の運命になつてしまふであらう。

* 筆者は前ブラジル名譽總領事。長崎、おらんだ、版畫等の研究家として知られてゐる。(神奈川縣足柄下郡吉濱町海岸)



ジュウル・ロマンと「善意の人々」

高 見 裕 之

ロジエ・マルタン・デュガールの「チボー家の人々」、ジュール・デュアメルの「バスキエ家の記録」とともに現存フ랑스作家の手になる長篇小説三幅對の一つであるジュウル・ロマンの「善意の人々」はブルガリアの獨立宣言の日を題名とした第一卷「十月六日」(一九〇八年)が一九三二年に發表されてか

ら、以後毎年二卷ずつ刊行、本年にいつて、前大戰の一大叙事詩だとも賞讀されてゐる「ヴェルダン」につぐ第十七卷「キネット對ヴォルシュ」、十八卷「人生の樂しさ」の刊行をみた。「ヴェルダン」では戦争詩をかけたジュウル・ロマンはこの二卷で、ふたたび、愛や苦惱、野心、罪惡などがうごめいて

ゐるしづかよどんだ世界、あらゆる人間が、いや犬さへもが憎み愛し、思索し混亂するバリのなかに潜入して、ささやかだが、どこか異様なエピソードと冒険をとりあげてゐる。ロマンはその作品中で、つねに、人物の性格、感情、思考、それをつむ雲圍氣情景の對立をかきわけて獨自の効果をあげてゐるが、卷と卷との對立によつて、いひかへれば、すべてを紛碎したはげしい時代のあとにこのいかにも生彩のない時代ををくことによつて一段と大きな効果をねらつたものとみることまでできる。

悠々と大河のやうにながれていく「善意の人々」にはおよそ三百人の登場人物が出没するのである。けれどもこれら無数の人物の活動する舞臺の中心がパリであり、かやうな都會がジュウル・ロマンの創作理念の重要な要素をなしてゐるところからして、かれの「ユナニズム」構成分子から都會だけを抽出して一言してみようと思ふ。もちろん、ユナニズムは都會ばかりでなく、村や町や軍隊やひろくヨーロッパ、白色人種、そしてそこに營まれてゐる社會生活、個我、愛、友情などを綜合したうへに成立つてゐるものである。これらすべてを検討したとき、はじめてジュウル・ロマンのユナニズムの本質に近く、くことができるのであるが、いまはかれがその處世詩集「一體

生活」からうたひつづけ、探究しつづけてきてゐる都會との關係をみるにとどめることにする。

その前に、ジュウル・ロマンの文學上の發足について觸れてをかう。ロマンの門出は大戦前にはじまつて、ほとんどすべてのフランスの作家がさうであるやうに、かれもまた、詩人として第一歩を踏みだしたのである。大戰前のこと、ロマンはヴィルドラック、マルコス、デュアメルらと知り合つた。當時は象徴派詩人の時代であつて、かれらもまたその精神的後裔たることをまぬがれなかつた。非常に純粹な心で文學に對してゐたかれらは、そこに金錢上の不安をもちこんでいくことを許さなかつた。したがつて、文學の世界を俗情の土足でふみにじらないやうにと文學と兩立し得るやうな職業、たとへば、ヴィルドラックは辯護士の秘書、アルコスは裝飾畫家、ロマンは教職、デュアメルは醫師を職業に選んだ。週に幾回となく語り合つてゐるうちに、清純な精神の夢はしだいに具象化して、ついに、かれらが僧院派の名でよばれるやうな結實をうむにいたつたのである、一同のなかで、もつとも夢想につかれたのがヴィルドラックだ。ヴィルドラックはラブレリーのテレームの僧院にならつて、しきりと「ぼくらは一しよに田舎へ引籠らう。そして僧侶のやうに生活しよう。友情以外にしほられるものない、

自由な僧侶として、ぼくらの時間の一部を詩作にささげ、残りの時間は物質生活を安定するためにつかはうぢやないか。」と提唱し、この希望は一九〇五年から翌年にかけていよいよ熱をたかめ、一友人の助力によつて、やがて、パリから十一キロばかり離れた寒村クレタイユにはゆる僧院生活が始まることとなつた。ここから、ロマンの處女詩集「一體生活」をはじめ、ザイルドラック、アルコス、デュアメル最初の作品が、しかもかれら自身の手で印刷行されて世にあらはれたのである。だが、この感動にあふれた経験も終熄した。一九〇八年、各人はふたたびパリへの道をとつて、それぞれの文學的コースをたどつていつたのだ。

一九〇八年といへば、いふまでもなく、ロマンが老大な「善意の人々」の起點を置いた年である。「善意の人々」の第一巻で、十月六日の午後五時におけるパリの情景が詩的高揚をもつて描破されてゐるが、あるひは、このやうな夕暮時にロマンもあたらしい覺悟をかためてパリに歸つてきたのかも知れない。この時刻には人波が大きく膨れあがり、朝とは反對の方向をとつて都心から周囲の環狀地帯、郊外へと移動していく一方、パリを見物するためにやつてくる外人觀光客や労働者、商人、學生、有閑人士、その他ありとあらゆる職業の老若男女を滿載し

た列車がつきからつきからと到着し旅客を吐きだしてゐる。そして人間の坩堝のやうなパリのなかや、ちかづきつつある車中に、まづ「善意の人々」の登場人物の行動が展開されていくのだ。

では、都會とはいつたどんなものであらうか。殊に大都市とは。

都市が文學にあらはれたのはちかいかいことではない。しかし都市が文學のなかに正面切つてすがたをみせはじめたのは人口の集中化がはげしくなり、貴族文學、宮廷文學がすたれて、ブルジョアジーの勃興とともに、文學がこのあたらしい氣運を作品化した時からである。われわれの前にはベテログラードとか、ウィーンとか、既にその都市としての發展的使命を果し篇つて文化的遺産のなかにのみその面影をしのび得るやうな衰退の都會がある。だからといつて、都會が作品の主題をなしたわけではない。作家が一の都會を作品自體の生命とみたわけではないのだ。都會がかきたかつたのではなくて、たまたま、作人物の生長發展し、思惟し活動する場が都會に選ばれたに過ぎないのだ。政治、經濟の都市集中と同様に文化の都市集中が必然的に作家をして都會に多くの材を發見させるやうになつたので、都會そのものが問題になつたのではなかつた。このやうな

ことは、現在のわが國の都會文學といふ名稱で呼ばれてゐる一聯の作品にたいしても指摘できる。

ジュウル・ロマンが都會がふかい意義を有し、そしてまた都會がユナニミズムの主要命題となつてゐるわけは、ジュウル・ロマンが都會を材として詩や小説をかいてゐるからではない。都會の生命に觸れようとしてゐるからである。いひかへれば、都會を一の背景としてみつめることではなくて、都會自體が主要人物であるといふことなのだ。

現在では都會はもはや人間が、汽車が地下鐵や船によつてはこびよせられ、工場、商店、官公衙によつて同一地域へよせあつめられるだけのひろがりではなくなつてゐる。相互に關聯のないものの寄木細工ではなくなつて、一存在となつてゐる。朝方にはあらゆる街路にあらゆる種類の車がうごきはじめ、やがて車の通行停止が都會の機能の停止となるのであるが、かうして、都會が自律性を獲得し、人間が自己の創作物であるこの巨大な生物に服従するやうになれば、こんどは都會が個人と個人の集合意識のうへに逆作用をおよぼすであらうことは容易に想像されるであらう。大きくて、不恰な存在がまるで意識をもつてゐるかのやうに、個人の感覺想像力、感情をたかめたり、にぶくしたりする。ロマンが好んでしめす街路や廣場、辻、劇

場、カフェはそれをつつんでゐる都會全體からきりはなされた要素に過ぎないけれど、それらもまたひとつひとつのおの特有の機能を以つて、全體に協和してゐる。

不恰好で大きな都會からその外觀を剝ぎとつて、ここにひそんでゐるメカニズムを、生命力をひっぱりだそうとつとめたのがジュウル・ロマンであつて、かれの初期のものに *Ville Consciente* (意識ある都會) と題する作があることからも、推量できるのであり、事實、この作品では、都會に意識をあたへ、そのなかに未來の神さへみいだしてゐる。

機能と人間の働きでつくられてゐる都會にもぐりこんだジュウル・ロマンの探索の目は、あたらしい限界のないこの世界が、いまだ眞の一存在をなしてゐないにしても、そこには、あたらしいリズムができ、都會自體が自分の生活を夢みてゐることを感得した。ちやうど、子供があたらしい歌をおぼえたときに、飽きることなくいつまでも繰返してゐるやうに、都會のメロデーはいつさいを飽和してはしてはしく繰返されてゐる。ロマンの都會に對する知識はふかめられていくにつれて、ますます内面的となり、神秘性をも加へて、かれを一種の恍惚状態にみちびいてゐるのではないかと思へるほどである。

都會のサイコロジスト、ロマンはそれだけに都會を愛するこ

とはひとしほ痛切であるらしい。リオンをマルセイユを、アムステルダム、ロンドン、ニューヨークその他の都市の性格を把握して内奥にふれようとしてゐるが、すべての都市にましてかれはパリを愛したのである。かれはどこかでつぎのやうな意味のことをいつてゐた、「わかいひとびとは大都會の活動と喧騒のなかにゐてたのしんでゐる。そこから説明しがたい慰安を享けてゐるからだ。他の人たちにとつて、石の裝飾が、もしくは幾千とない俗な賭事の結合に過ぎない都會が、かれらにとつて、愛の對象となり、またかれらの感情がかれらを驅つて、都會の外装を超えてその向ふ側にある、まだまだひとに知られてゐない現實の教義をつかまへるようにならねばならぬ。」と。「善意の人々」におけるパリはロマンの都會に對する知識の集大成であつて、無数の作中人物におとらぬ重要異色な登場人物なのである。

近刊豫告

ジュール・ロマン

善意の人々

(第一巻)

「十月六日」 (譯者)

川崎竹一 園部 正孝
 權守操一 高見 裕之
 渡邊 明正 木越 豊彦



マキアヴェルリとの一騎打

多賀善彦

マキアヴェルリと私の因縁はかなり古い。といつても一昔あまり前からのことで、學校を出て二年、政治學史といふ難物に取つついて西も東も分らない頃、突如として講義を命じられたときから始まる。昭和四年の秋である。

その頃の私は時代の嵐を存分に身に受けてゐたので、祖國日本の驚くべき變動期を、政治學史研究家として如何に生きなければならぬかが實に大きな課題として自分の前に現はれ、また經驗の淺い身で困難な學史を青年學生に講ずる道場へ出る前の身構へがまつ決定すべき仕事だと感じてゐた。様々な考へに採みぬかれた結果、西洋政治思想が一轉回を劃したイタリヤの復興期を講義の題目として撰び、古典復興のうちにこそ新しい前進の一つの力を見出し得ると同時に復興期を作り上げた人

批評

一冊三十錢(送料三錢)
 半年一圓八十錢(送料共)
 一年三圓六十錢(送料共)

新年度目次

ヴァレリイ論	吉田健一
藝術の天才と英雄	植村鷹千代
「あらたま」の古典性	平野仁
英吉利モラリストの系譜	西村孝次
知性の舞臺	中村孝次
悠々たる精神	西村孝次
藝術家としての批評家	ワイルド

「批評」第一輯十二冊合本豫約募集
 頒價四圓送料共(申込締切一月十五日)

内容一覽

詩人論(四篇)	伊藤信吉
作家の肖像(四篇)	山本健吉
正宗白鳥論	齋藤正仁
子規・茂吉・賢治論	平野啓
ヴァレリイ・バクスレイ論	吉田健一
感想	中村孝次
スキフト論	西村孝次
ドガに就て	グアンスタール
文藝學論	ホフマンスタール
假面の書	グウルモン
シエークスピアの晩年	ストレーチ

座談會
 出席者 小林秀雄・柳田國男・河上徹太郎
 横光利一・佐藤信衛・中島健蔵・林房雄
 岸田國士・久保田万太郎・外同人一同
 東京市麴町區永田町一ノ一七 吉田健一方 批評發行所

人、殊に政治思想家たちの慘憺たる鬭争のうちにわれわれが祖國の變換期に處すべき力を酌みとり得られるのではないかと考へたのだつた。つまり大學舊來の様式に従つて西洋政治思想史を専攻してゐながら、日夜、日本の動搖する苦惱を感じ、さりとて西洋の咒縛を解き放ち得なかつた自分は、せめてもの思ひに復興期の革新性を話して見たいと考へた。實は自分自身の勉強のためであつた。

講義は復興期全體に亘らず、結局、その筆頭たるニココロとその直接の後繼者たちの話で秋冬の學期を埋めてしまつた。熱心な學生諸君には何か濟まない氣持になつたが、講義が濟むと忽ち留學となつたので、自分の話下手のために不必要なマキアヴェルリだけを詳述しすぎたとの先輩の批評に些か閉口して印

度洋を渡つて行つた。こゝで三年間マキアヴェルリとの縁は暫くの間、杜絶へ勝ちになつた。

勿論昭和七年にはフィレンツェの春を目ざしてシムプロンを滞り抜け、マキアヴェルリの由緒深い家、寺、山野に赤毛布を擔ぎ廻りはしたが、文留すなほち文部省留學生の悲しさで旅行をすれば本は買へず、二つに一つは諦めねばならぬ財布の輕さに、ニコロ研究家などは大口も叩けないほど貧弱な文獻蒐集力しか有ち得なかつた。

歸朝後は重大事件に引續いて身邊騒然として落ちつくひまもなかつた。そのうちに身の程知らぬ無謀な過勞に倒れ、否應なしに繁居生活を強ひられ、更に貧乏のどん底に陥つて腎臟滴出手術の傷痕に浮世の風の痛みを味ひつゝ、曲りなりにも其日の糧を得てゐたさなかに、創元選書にマキアヴェルリの評傳を書いてはどうかと持ちかけられた。それがきつかけとなつて計畫は大きくなり、評傳を出す前に作品を世に紹介しておく方がいいといふ私の希望が容れられて選集の仕事にとりかゝつたのだつた。

昭和十三年秋半ばから譯業を始めたが、それから一年半あまりの歲月は全く日夜マキアヴェルリと取組合つて過した。京都の聖護院御殿わきの露路裏、六疊一間の二階に陣取つて、外へ

けなければ體が保たぬと何度となく警告したが、マキアヴェルリと取組んでゐる私は、過誤に満ちた短い一生がこのために縮んででも何かの捨石になつて、後世に私より遙かに高い才能に恵まれた學者が此のイタリアの、否、西洋そのものの代表的政治學者たるニコロ・マキアヴェルリを眞實の姿で理解し、東洋人として殊に日本人として之を正しく止揚して東洋政治の指導力を涵養するものとして拙譯本を散々に鍛鍊して現在の譯學よりも遙かに秀れた刊本を出される素材となれば以て瞑すべきだと思つてゐた。何度か机掛を擦り切り、何度着かへても右袖の袖口を擦り切つて糸を垂らす慘憺たる姿になつたのに、右手の皮は擦り切れもせず、指から腕にかけての痛みは二週間のうちに薄らいでしまつた。體重は極限と思はれる重さまで下つたが辛うじてその最低と思はれるあたりを上下して、體力もさほどに衰へなかつた。人間は討死の覺悟が出来れば何かしら出来るものだと思つたのは、今年の春暖やうやく兆し始めるときだつた。

譯業が逐次に公刊されるやうになり、様々な激勵や批判を聞く。一應、出來上ると自分にも不満を感じさせられる所がやたらに眼につくが、とにかく眞剣に仕事をさせて貰つた感謝の念は、さらに業を續けて選集完成に漕ぎつける力を強めてゐる。

出るのは近所の湯屋へ行くのが關の山。朝八時から夜の十一時まで書きに書いてゐたが、原稿紙千枚位の邊で、机にかけた布は腕の當る机の角にあたる部分が擦り切れてしまひ、右の手指から始まつた筋肉の痛は次第に肩に及び、遂には指が痛いのを通り越して言ふことを聞かなくなつて、筆を執るときは勿論筆を置いたときも曲つた切りになつてずき／＼痛んだ。文學者諸氏がさういふ苦しい經驗を嘗めた話をも物の本などで讀んだのを思ひ出し、これが所謂「書癡」といふものかなと、湯のなかで右の指や手首をもみながら考へたりした。それが生憎く眞冬に差しかゝつたときで、貧しさゆえに炭火も乏しく、壁のすき間からは朔風が吹き込み部屋中を躍り廻るなかに、痛んで動かぬ指が凍えてペンも握れぬのを、縋帶でペン軸を指に縛りつけ、些か意地になつて書き續けた。

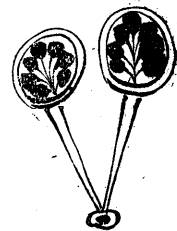
貧乏の苦しみも、身體の痛みもマキアヴェルリの苦惱を共に悩み、彼がイタリアをフランス、エスパーニア等の外夷の支配から解放しようとする憂國の熱意は、アジアを西洋の羈絆から自由になければならぬと決意する私の心に直ちに響くとき、腕のうづきも傷痕の痛みも總べてが忘れ去られた。そのころの私の體力は未だ十分に恢復してゐなかつた。醫者は一日に起きてゐる時間と、寝ころんで伸び且つ眠る時間を十二時間づゝに分

選集も、京都の寂しい環境で外界と全く交渉を断ち切つたらこそどうにか纏められた仕事なのだが、今、私は東京で新しい仕事に就き都市の騒音のなかに生きてゐても、選集の完成が私にとつての「職域奉公」の一つであると觀じて零細な餘暇を削いで之に獻げてゐる。選集を先づ完成させ、然るのち評傳を書いて見たい。

私はこの譯本が枕邊の書物として親まれる原本の味を幸に傳へ得て、日本の政治學者だけではなく、政治に志すひとびとが日夜親しまれ、アジアを西洋から解放して正しい地位に復讐せしめる生き方を會得し、天業恢弘に翼養される一助に役立たせたいと念じてゐる。

マキアヴェルリの作品が廣く且つ正しく讀まれるやうになれば、日本の政治も一人前だと立言するひとがある。果してさうだらうか、又、それでいゝのだらうか。私はこの反證たるべき事實が現れることを祖國のために祈りつゝ仕事を續けてゐる。

* 筆者はマキアヴェルリ選集(創元社)譯者、前立命館大學教授、政治史研究家



日本の科學

菊池正士

近代科學振興と云ふことがやかましくなり國民全般の科學に對する關心が高まつてゐる様である、一體日本の科學は他の諸外國に比較してどの程度に發達してゐるだらうかと云ふ疑問は専門外の方が當然持たれるだらうと思ふし、又是の點に關するはつきりした認識がなければ政治家が科學振興を國策としてとりあげて見た所でその處置に飛んでもない誤りを來す恐れが多分にある。是の間に對する答へは専門家のみがなし得るのであつて局外者の皮層的の觀察では到底なし得るものでない。又専門家にしても自分の専門内の事に就いては相當はつきりした見解を持つことが出来ても、科學全般に亘つてどうであるかと云ふ判斷になるとなかなかむづかしい。併し此の問題は大變大切な問題であるから専門家がその意見を發表する時は餘程慎重にすべきで無責任な斷定をする事は甚だげないことである。今迄専門家の意見として發表されたものがどんなものであつ

是は前の疑問より更にむづかしい、而し此の疑問はすでに日本の科學が駄目であることを認めたから是を振興しなければならぬ。而し一體日本人に素質があるだらうかどうだらうかと云ふ疑路から出て來るのであつて現在日本の科學が充分ならばともそんな疑問はなかつた筈である。

だからまず第一の問題をはつきりさせなければならぬのだが、是は實際部門によつて非常に異つてゐるらしい、現在の最高水準を百點とすると、ある部門では九十點以上の所もあるだらうし、又ある部門では零點に近い所もあるだらうし、平均點恐らく、五十點か四十點位になるのではないかと思ふ。ドイツが八十點、米國が矢張り八十點、英國が七十點位な見當ではないかと思ふ。是は何も確たるデータによつて云ふのではないから相當無責任かもしれないが恐らくその邊ではないかと思はれる。云ひかへれば日本の科學はまだまだとても駄目だと云ふことになる。

併し此の點數は平均點なのであつてすでに云つた様にある部門では随分進むのであるから必ずしも素質の點まで疑はなくてもよいと思ふ。一番の原因は研究者の數が少いので手が廻り兼ねるからある部門では零點と云ふのが相當あり、その爲に平均點が悪くなるのだらうと思ふ。

たかはずきりした記憶はないが、大體に於いて二つの極端な部類に分れてゐる。日本の科學はなつてない、と云ふ人と、日本の科學はもう充分だ、外國の助けなんか要らない、と云ふ人と二通りある。

此の後者の方の説は本當の専門家の間には見られない。世間では専門家の様に見えても専門家から見ると門外漢の様な人達の口から出てゐる場合が多い様である。多少矛盾した斷定が出て來るのは恐らくはその人の専門のちがひによつてそれぞれ部門に於いて日本人のした仕事が多かつたり少かつたりするので各々が狭い範圍の觀察から斷定するからそんなことになるのだらう。

今一つの問題は日本人に科學的素質があるかないかと云ふ問題である、是に就いてもいろいろな意見がある。是に關して一番確實な判斷は一體何を資料として下したらよいのだらうか、

研究者が少いと云つても毎年理科系統の學校を出る人の人數は随分あるのにどうして少いのか不思議であるが、要するに優秀なる研究者が少いと云ふことになる。それなら素質がないのではないかと云ふことになるが、又一面には優秀な人が理科系統の學問をしないで他へ行つてしまふのではないかと考へられる。それで最近では學問をする人の待遇をよくしろと云ふ様なことが盛に云はれてゐるが、それも一つの方法かもしれない。而し私の思ふ所では學者自信の努力にまだまだ足りない所がたくさんある。大學の先生なんて悪いことさへしなければ首になる心配がないなんて云ふ制度など一體誰が作つたんだらう。又應用方面をやる人と基礎をやる人との間の連絡のないこともひどいと思ふ。基礎をやる人は應用のことを知らないし應用の方をやる人に基礎的の智識を持つた人が非常に少い。僕は大學の工學部等止めてしまつて、理學部に大きな應用理學の部門を置き、工學部は高等工業の様な純粹の技術者の養生所にしてしまふ方がいゝ様な氣がする。

日本の科學の振興と云ふことは實に重大問題にちがひないのだから、是に對するいろいろの對策はなんだかまだ甚だピン트가はずれてゐる様な氣がする。



晩秋の鐘

小竹 無二雄

この頃沁々と考へる事は、よくこうも漫然と四十七年の長い月日を生きて来た物だといふ事である。

幼い時にも、學生時代にも、研究生活へ入つてからも又學校の教師になつてからの九年も、扱てこれといふ印象の日とでも云ふ可き日の一日とても、感慨らしいものの片鱗すらもが残つて居ない。

子供の折日露戦争に出征する兵隊は夜中の三時といふ時刻さへも缺さずに見送り、凱旋する勇士も洩れ無く出迎へたので、戦争が濟んでの後に全校只一人の無缺席兒童として御褒美を頂いたが別につらかつたといふ記憶もうれしかつた思出も無い。

北海道の果から鹿児島への本當の流浪の生活を送つた筈の高等學校生活には何等かの心に刺戟があつて然る可きであるが、更に何物も無く、燒打事件のあつた大學生活の思出も將に平々凡々である。

このお芽出度い男の目にもこの頃の邦家の眞の穢が醜ながらに寫つて來、少からず足り無い頭にも之はおかしいぞと言ふ自覺めいた物が生じて來だした様な氣がする。

醜態して無くしたか、醜態して居る中になくなつたか知らぬが兎も角も物資の中に著しく足り無い物が出て來て居り、それよりもつと大切なものが更にもつと缺乏して來て居る等と氣付て來ると、自分の専門の科學の社界が一番いけないといふ事になつて居る。一體何千の同僚が四十年五十年何をして來たのだいと他人事の様に言つて見ても今更追付く事では無い。

凜然たる國家の危機に立ち、フランス敗亡の跡をふり返つて見る時、父も母もみまかつて、人生の宿命といふ五十を目前に控た今、やつと四十七年間忘れて居た一番大切な物に氣付いた様な氣がする。艱難汝を玉にするといふのが之なのであらうか、それにしては骨張つた玉ではあるが。

私は大阪に移り住んでから屢々何のために研究して居ると問はれたが、その度に研究は眞理の探究であつて何のためとかいふ様に、ためにする物ではないと答へ、解つた様な解らぬ事を述べて自らは高遠な學者面をして來、大阪の人々からは濟度し難い奴とあきらめられて來た。

この私が一度學生に向ふと、試験等は最の骨頂だが悪い成績

留學の途中シンガポールで關東の地震に會つて、中野に残して來た妻子の安否を氣づかつた事は確であるが、之とても、ウロ／＼した覺に過ぎない。在獨二年沈香をたい記憶とて無く歸國以來十五年正に夢死して、屍もひらずと申すより外に説明の仕様も無い。

實に結構と言へば結構至極、不甲斐無いと申せば眞に以つて不甲斐無い限りの明け暮である。生來無神經に出來て居るためとてもいふのであらうか。

今度の事變が起つてからも、四年、南京米がどうの藥品がどうの、統制で鋼が食へぬとかコマギレがどうしたとか實に愚にもつかぬ愚痴をならべて、己れ程解りの好い人物は無い様な顔をして來たのであるから、眞に結構な出來とも言ふべきなのであらう。之が骨董なら相當な値打物とも思へるが生き物でやたらに日本米を食ひたがるだけ厄介者である。

をとつて置くくと一生損だから勉強しろと説いて居つたのである。即ち私に教へられた學生は損得づくで勉強を強要されて來たのである。この思想は研究の上にも若干は流れて居る事であらう。

さういふ事を言ふ夫子自身は利害を超越して眞理の探究に專念して居ると號して居るのである。こんな矛盾だらけの男に碌な事の出来る理のあり様が無い。將に然りで、我國に類の無いと言はれる人を師と仰いで研究生活二十年になるが、幾千の眞理も究め得た事なく既に人生の秋も更けて行つて居るのである。

この苦難の日が邦家に訪れなかつたならば私の人生は全く感量無しに人生に終つた事であらう。

然し私は今私共の忘れて居つた物、——それは私共が當然持つべかりし信念であると思ふが、——に氣付いて來た様に思つて居る。この信念の琢磨に私共は信賴し會へる兩三人の同志をも得て今再び私共の研究生活を見出さうと思つて居る。

晩秋の山野蕭條たる曉鐘を聞く心持ではあるが、やがて萌え出すであらう若草には春のおとつれの曉の鐘であらうと思へば心自ら和むものを覺える。

* 筆者は大阪帝大理學部教授



丸本のことなど

豊竹古鞆太夫

此秋の始めに松竹宣傳部の中村氏と創元社の加藤氏とがわざわざ粉濱の拙宅に見へて 何か古本に對しての語をせよとの事 私は無學で何事もわからずことに筆もまわらぬ者故御款しを願ひ度しと御わびを申したが何んでもいいからしゃべれといはれるのでそんなら自分のおもつた事をいふて見ませふとて御話をした

私は難い時から人様に本をいただいても其本に第五と番號がある時は直に二三四を據へないと氣のすまぬと申辭がありました

所で私は東京の生れで十二歳の時に大

阪へ義太夫淨瑠璃の修行にやつて來ました 其頃から自分の業とする義太夫の丸本をぼち／＼と集める事を樂しみにやりかけましたが其時代は一冊が古本で五錢か六錢又は良き本で十錢も出せば求められたものです 其後一度東京へ歸へり又十六歳に阪地へ参りましてまた／＼丸本をためだしましたが十八九歳に成りまして小遣がなくなると折角ためた丸本を賣り飛ばして仕舞ふ しかし又買へばいつでもあると申す氣が有りました 本も澤山に古本屋に積重ねて有つてまだ／＼安くかへました 買つては賣 うつては買と申様な事を何度となく致しました 夫

れが明治末期には丸本をどし／＼買求める學校や學者の方々が澤山に出來て追々と本がなくなりかけて來ましたのに氣が付き是はいけない自分は何物もわからぬ内にさがし出して出来るだけ手元へ殘しておきたいと考へたが 義太夫道の文獻と申物はすくないと申事を先輩からよく聞いておりましたからまづ人形芝居の古番附をよりよりに集めかけましたが是が中々ありません 漸々と一番古い所で享保十八年七月から元文 延享 寶曆 明和 安永 天明 寛政 享和と引續き手に入りましたが 此時代の番附が全部揃ふと申事は出來ませんが竹本座初代政太夫時代 又豊竹座越前少様(東之元祖)時代 書卸し外題の二枚番附なども澤山有ります 其後文化 文政 天保間の方も大方揃ふ位になりました 夫から弘化 嘉永を始め安政 萬延 文久 元治 慶應の

時代のは大方揃ひ 明治 大正昭和の今日に至る迄の分は各芝居の部は揃ふて有ります 枚數で三千四百枚になつて参りました 他に人形淨瑠璃に關した繪繪とか人氣顔附大番附なり又其時代の種々な物迄數多集めて居ります 大昔のボスマーなどに中々面白い物が有ります 實に義太夫道に關した文獻と申す物は前にも申しましたがほんとに少數より出ていないものと見え評判記なども中々手に入りかねまして茲廿ヶ年許りの間に

今昔操年代記 享保十二年刊

猿 口 嚀 延享二年刊

浪華其未葉 延享四年刊

操曲浪花の声 延享九年刊

京大阪操西東見臺 寶曆七年刊

女大名東西評林 寶曆八年刊

新評判蛙歌 寶曆十二年刊

新判花相續 寶曆十三年刊

評判角孝声 寶曆十四年刊

評判三國志 明和三年刊

評判鶯宿梅 安永十年刊

操評判聞之磯 安永十年刊

淨瑠璃秘傳抄奥評判記有 天明二年刊

江戸版今昔操年代記 寛政八年刊

浪のうねり鼎噺 年號不明

此十五冊より手にはいりません かういふ評判記を見ますると其時代の太夫方の語り口も外の事もわかる事があります

又其他 鶯鷄ヶ袖やら加賀様の大竹集

竹子集 新小竹集 翁竹 瑠璃本記及び

義太夫に關した種々の物が貳百種以上た

まりました 夫れから丸本ですが前に申

しました通り何度となく賣り拂つたりし

たあげくに是はと氣の附いた時分には本

の御値段が無茶苦茶にお高くなつて申々

元のように一冊を五錢や十錢では賣つて

くれぬ時代になりましたが夫れでも今か

も求めて置かぬと一年々々丸本が此世

から消へて行くと思ふて集め出し 只今

で近松作と各先生方の推定ある物迄を入

れ 外に同翁作の外題異本を合せ百四十

冊 又紀ノ海音作冊一冊 其他の作者の

出せし物四百七十二冊 右の内には錦文

流作の虎ヶ石とか男色加茂侍なども有り

又會根崎心中後日遊女誠草やら梅屋瀧

浮名之色場 傾城買指南 富貴會我 心

中戀之中通 種彦作の勢田の橋籠女の本

地 其外版下本で隔田川續佛 新版繪本

浪花詠 天一坊實記 契情天の羽衣 邯

鄴曲輪短夜之夢と申す外題では是から版本

に致す本など珍らしいのが有ります 夫

れに今昔妹背之腹帯と申す宮園節の丸本

があります たいがい宮園の本は一段

本が多いのですが五段物の丸本があるの

は珍らしい物と思ひました 又長枕褥合

戰などと申す珍本も有ります 他には山

本角太夫節は京都の後に土佐様の本

江戸虎屋土佐少様は江戸土佐節の本

又薩摩外記節 岡本文彌節 伊藤出羽様

説經節ら百冊以上になつております
此外にも十年許り前から古淨瑠璃 金平
本とか六段本とか申す畫入の本を集めか
けましたは是が又澤山出ません 出まし
たらば實に馬鹿らしい高い値段 古本の
骨董扱です かういつた畫入本なども安
く澤山にごろ／＼してゐた時代がありま
したが、そんな頃にはこんな物はいらな
いなどと申しておりましたがおいしい事を
しました

其頃から集めていれば珍らしい物が澤
山にありました 此頃は中々出ません
此畫入本も只今では九十冊許り集めまし
たが是は萬治 寛文 延寶頃の物ばかり
で慶長 元和 寛永 正保 慶安 承應
明暦時代の畫入本がまだ一冊も手には
ありません 私若き時分によく夜店を
歩きました ふと丸本が目にあつて
其外題が自分の持つていない物であつた

其本屋に遇ひますと其本は今買れました
と言はれた時程残念な事は有りませぬ
其本がひとしほ良き本の様な氣がして一
日くしやく致します 又丸本を調べま
して一人で嬉しくなる時が有ります そ
れは鳥渡例を引いて見ますとよく皆さん
が語つていられますもので天網島時雨炬
燵紙屋内之段 又は壽連理の松湊町之段
や櫻鑄恨鮫鞘鰻谷之段 八百屋獻立新軀
八百屋内之段 まだ他にも澤山有ります
が此外題の物は丸本には有りませぬので
一段物で増補したものかと思ふておりま
したが皆違つた外題の中にはいつて有り
ます物を少しく文章書きかへて此外題を
附けて語り出したもので 先づ壽連理ノ
松湊町は夏浴衣清十郎染と申す丸本の中
に湊町の段があります 又時雨炬燵の紙
屋内は置土産今織上布と申物の中に皆さ
んの語る紙屋の段が有りました 此丸本
は曾根崎新地での出来事 彼の菊野殺し

時 又は氣なしに求めて歸へつて目を通

して讀んで見て面白かつたりした時の其
愉快さ嬉しさは何んともいへませんです
只今は不精者になり夜店どころか文樂
へ勤めるだけで他家に許りおります
それでも東京へ年の内に一度なり二度な
りを出ました時には淺草雷門の淺倉屋さ
んを始め神田の一誠堂 巖松堂 大屋
田口 村口 本郷の木内や弘文莊など
さりに出がけます事が東京へ参ります時
の楽しみであります 又何か珍らしい本
が手にはいりまして是を誰れにも手を附
けさせず自分が整理を致すのも私の樂し
みの一つです

前にも申しました版下本の内隅田川續
佛と申す外題は歌舞伎でよくやります彼
の法界坊の淨瑠璃で是は歌舞伎畑から義
太夫に書直した物で 此本は版本になら
ずに終つております 一般に知つて居る
者は有りますまいと思ひます 只時々人

五人斬と小春治兵衛を一つにまとめた淨
瑠璃で其中の中の巻がそれである 尤も
終りの所は少し文章違へども子供が尼に
なつて来て白無垢のちらし書を讀む所も
ある 是を時雨炬燵と外題を替へて語り
出せしが今日迄残つて結構な近松作の天
網島紙屋内から大和屋の段が埋れて仕舞
つたのであります 又お妻八郎兵衛鰻谷
の段は櫻鑄と云ふ丸本はないのでして
是は楳重浪花八文字と申す題の丸本六つ
目が此頃語る鰻谷の段である 是は文章
を替へてなく櫻鑄恨鮫鞘と外題を附けて
語り出し それが其儘残つております
今一つはお千代半兵衛八百屋で是は江戸
で出来た物で 尤も近松作の宵庚申とて
名高い物も有りますが江戸の方は萬代會
我と申す外題の物を前淨瑠璃とし後淨瑠
璃に此お千代半兵衛とお夏清十郎 お半
長右衛門 此三つの外題を一日替りに興
行した時に出来たお千代半兵衛の中にあ

形芝居では法界坊庵室と隅田川位が出て

おりますだけで全五段を通してやつた事
はありませんから 夫れ故私共らも聞い
た事はありません 今私の手元にある版
下本が残つてあるだけと思ひます 丸本
になりました物でも紛失したり焼けたり
して其版木が段々消えてないものが澤山
にあります 私丸本を集めると申す事
は五行稽古本を拜見致ますとよく文章や
文字の間違ひがある 夫れは丸本を見る
と成程やはり五行本が違つていたと思
ふ事がよく有りますから何でも丸本を調
べるに限ると思ふ所から集めかけた事
です 私は何と申しても丸本通りに文章を
やつておれば間違ひはないと思ふて成る
べく丸本に寄つて語る事にしております
勿論皇室に關した文字や種々の事は氣
を付けて省略し又改めて語るようにして
おります 又或る時に珍らしい外題の物
が即賣の目録に出ますと早速飛んでいて

る物を萬代會我八百屋の獻立と申す外題
を附けて語り出したのが後に三代目豊竹
若太夫が此段を面白く語り 夫れから大
いに流行したので是も又増補物によるこ
ばれて近松作の宵庚申が其儘になつてし
まひました 尤も此段は猥褻で當今では
語れない物ですから どなたも語られま
せんが堀江の五世彌太夫師の十八番物で
實に結構に聞かして頂いた事が有りました
た こんな事で或外題の中にある物に新
に表題を附て流行した物が澤山にありま
す 夫れを丸本を讀んで見出した時は嬉
しいものです 今後もし／＼と義太夫
道に關した古本はもとより新しき洋紙の
本も集めて残しておきたいと考へており
ます
こんなお話ならばまだ／＼ありますが
餘り同じ事を長くならすからもうやめ
ておきませう (昭和十五年十一月)
*太夫は大阪女樂座所屬

「文學の宿命」

平岡昇



ブック・レビュー

これは文學者ジョルジュ・デュアメルが自分の文學上の大先達として崇拜する二人の偉大な文化人エラスムスとセルバテスにつましく捧げた頌辭である。

この二人はデュアメルにとつて、文學者を象徴する存在であつて、彼が文化人としての反省にふけり、藝術家としての祈願を行ふとき彼の精神を照らす燈火となつてゐるらしい。原題の『二人の師匠』には守護神といつた意味がふくまれてゐるやうだ。譯者はデュアメルの意圖を耐んで、この二人の生涯と業績の現代知識人に對する一般的な教訓を指示するため、『文學の宿命』と題した。確かに、エラスムスとセルバテスの生涯と事業は、文

化と知性の役割と宿命についていまなほ古びない不幸な眞實を語つてゐるやうに思はれる。そして、デュアメルはこの二人の先達に對して自分とのつながりや對照を掘り下げたといふよりも、この二人の人間と仕事を鑑として、それを絶えず謙虛にふりかへりながら、自分の文學者としての覺悟や心得を循々と説いてゐるのである。それがこの本の指示する教訓の一般的、公理的であるにもかゝらず、ゆたかな具體性や質實な説得力を具へてゐる理由であらう。

どの時代でも知性がこの世から受けた待遇は苛酷なものであつた。いつの世にも文化の眞の保持者や創造者がほとんど

例外なく一種の無名戰士であつたことは、デュアメルがこゝに擧げてゐる二大無名戰士の例にまつまでもない。浪漫派風にいへば、凡そ文化と名のつくものの歴史は、奴隸の哲學者や乞食の詩人や賤民の科學者に滿ち滿ちてゐるだらう。少くとも文化の偉人はいまだ嘗て英雄の扮装をして現れたことはなかつた。我々はまだから十五世紀から十六世紀にかけて近世黎明期のヨーロッパ精神界の王者エラスムスが『箒の代りに筆を持つ家僕』から始めた哀れな私生兒だつたとしても、また世界文學の典型的傑作を創造した未曾有の大作家セルバンテスが『物語にもならぬみじめな生涯』を送つたとしても、恐らくさほど驚くにも當らぬかも知れない。だが、この二つの實例が帯びてゐる象徴的な意味の恐ろしさは幾度回顧されても足りないのだ。この本は二人の文化人が文化を創造したり保持したりするこ

との歴史上最も困難だつた時期にあつたわけの文化的業績を完成し得たことに對する驚異と感謝を繰返させ、その完成の過程に於て彼等の蒙つた數知れぬ苦難と追害に對する同情と怒を新にさせずにはおかない。同時に、廣い意味で知識人乃至文學者の宿命を更めて見直させ、中途半端な覺悟を投げ棄てさせずにはおかない。なるほど、この二つの一見異常な例はさうした宿命を甚だしく誇張してみせはするが、しかし事實そのものの象徴性は今なほ少しも消え失せてゐないのだ。現に我々の住む現代がそれを證明してゐることをデュアメルは確信してゐるし、我々も否應もなしに確信させられてゐるのである。

エラスムスは世をあげて狂熱的な争闘に没頭してゐた時代に、平和と眞實を守るため争闘の舞臺から身を引いて『純粹觀客』たらんとする知性の高潔な妄想を

最後まで追ひ求めて、とにかくもその生涯を『理性の傑作』たらしめた純粹知識人の典型である。セルバテスは混亂と汚濁との時代、人間を卑小にし、傷つけ、汚し、いびつにし、果ては蹂躪してしまふあらゆる最悪の環境に繋かれ苦闘させられながら、人間性の至純な光輝と大らかな夢とを無垢に守りつづけ、驚くべき天才を育てあげた不幸な詩人である。確かにこの二人の異常で、而も典型的な例は、無力な文學者が酷薄な世に處して、文學を知性をいかに守るかを教へ、又その限度と可能性を暗示するやうに思はれる。そこで、デュアメルに導かれて、我も眞剣にエラスムスの知的な貴族主義の高さと弱さを測り、又セルバテスの生涯と作品が示してゐる深い『逆説』と『模範』とすべからざる模範の前に沈思しないではゐられないのである。

* 筆者は東大佛文學研究室勤務。「英國文學史」(講義)品川區上天長寺五二七八)



アランの「バルザック」

水野亮

アランの「スタンダール」は作家論で、作家としてのスタンダールのいろんな面に觸れた概論である。これに反して「バルザック」の方は小説人物論でつまりバルザックと云ふ一作家の作品論を形づく

る一要素だけを取り上げて論じた特殊研究なのである。アランはバルザックの小説を手あたり次第読んでゆく、そして一作を読み終へる度に、なんとはなし筆をとつて、かつ書きかつ考へながら、小説人物に關する感想を纏める。それもごく短いものばかりで、例の「語録」の一章分にほぼ相當する位の分量である。そ

れを根氣よく繰り返して原稿が相當の枚數に達した頃、序言めいた章と結尾めいた章を前後に付け加へて一卷物にしたとしか受け取れない。従つてその前後の章を除けば、どこから讀んだつて差支へない、至極肩の凝らない讀物である。序言めいた章は「讀書の幸福」と題してある

が、夫子自身のこの本もまた讀書の幸福を感じさせる本である。御大層な體系に立て籠つて萬事を四角四面に律することの嫌ひなアランの癖が、こんな小著にもはつきり現れてゐて面白い。いま一つ面白いことは、アランがこれまでの専門批

評や作家批評のすべてを、痛快なほど一把一括げに無視して、一顧だに拂つてゐない點である。いくら遊撃批評とはいへ、これはあまりに先人に對して失禮な語であるが、アランのことだからどうも致し方が無い。そのかはりバルザックの作品を廣くまた繰り返し叮嚀に讀んでゐるとも驚くばかりで、まさに原題どほり「バルザックと共に」である。餘人は一切遠ざけて、びつたりバルザックに寄り添つて坐つてゐるのである。

さてアランはそのやうな讀み方によつて何を求め、何を教へようとするのか。つまるところ小説人物と觀念の結びつき如何を搜つたのである。觀念が人物を殺してゐないかどうか、人物と觀念が遊離してゐないかどうかを調べてみたのである。……讀む樂しみを別に、私はバルザックのなかになにを求めたかと云ふと、物質マテリアルを擡トひ、この大地からちか

に芽生えた觀念をである。さまざまな顔を持つた觀念をである。……」

政治觀念といつたものでなしに「猫のやうに神祕極まる政治家たちである。戀愛の情熱についての概要でなしに、富める或は貧しき、信頼深き或は嫉妬深き、幸福な或は不幸な、ひとさまざまな情人たちをである。……」

アランは満足すべき結論に達したわけだが、その道程として簡潔無比な言葉で、かゝる結論の搖ぎなき證據を、ぼつぼつと集めていつたのである。バルザックの人物論として、これほど深く抉つたものは、ほかに一つもないやうな氣がする。アランが特に援用した場面や言葉は、その大部分が既に他の研究者によつて一度は引用されたもので、その點で新しく教へられるところは少ない。しかし一つの章を讀み終へるたびに、何か眼を洗はれたやうな感じに打たれるのは、氣づかな

いままに見逃した平凡な事柄を、改めてアランから指摘されるからである。アランは、どうでもいふようなことの意味を立ち止つて考へるといふことに、讀書の樂しみ、——バルザックを讀む樂しみのあることを教へてゐるのである。色々考へ合せてみて、この本は遊撃批評として長く残るべき傑作といへよう。

譯者の小西茂也氏は、すでに「暗黒事件」の譯業があり、近くまた「滑稽譚」を發表される筈で、バルザックには十分の年期を入れた専門家である。小説人物や引用句がなんの斷りもなしに續々と出て来る本を譯すのには打つてつけの人であり、達意を主としたその譯文は、アランの云はんとするところを充分に傳へて居るやうに考へられる。バルザック文獻に意義ある寄與をされた勞を、一讀者として心から感謝したい。

註 これは元來文學を本職としない人々が、時あつてその體系を引つぎて文學に肉薄する際になれる文藝批評のことである。

(この文章は帝大新聞から轉載させて頂きましたが、紙面の都合により前半を略させて頂きました。讀者の方々に御了承を願ひます。)

* 筆者は東大圖書館勤務。バルザック研究者。(杉並區井荻町三ノ二)

バルザック
宮崎嶺雄譯
再版出来

谷間の百合 上巻

創元選書
定價 一・五〇

下巻 近刊



嘉村儀多 の倫理と郷土

松村 泰太郎

私が、嘉村の文學に義太夫的要素を描するの、宇野氏の「觸り」「秋立つまで」の解説即ち、文體に極限された意味ばかりではない。嘉村と郷土を同じくする私は、彼の描いた世界に、倫理的に義太夫の世界との近似を見るからである。嘉村は「觀察家」でなく、倫理家の文體である」といふ小林秀雄氏の評言は達見で、この立論から這入るのが私には都合が良い。與へられた紙面は僅かだが、なるべく具體的に書いてみたい。

有島武郎の情死事件や、野村隈畔の遺書に對し、「淺間しい犬猫」とのしり、「人間の自我の流動を」醜惡なものとし、「自分が罪惡、罪惡といふのは、他人は罪惡を感じない無智だが、自分はそれを感じる高尚な人間として誇るのではした」とか、『お染久松』の悲劇を見ると、

んでをるにきまつてゐる。憎んでも憎み足りない私であつても、八年の間良人と呼んだのだから、憎んで憎み甲斐なく、悪口言つて言ひ甲斐もないことなのである。失敗しないよう陰ながら最負に思つて念じてくたでゐるに違ひないのだ。たとひ肉體の上では別々になつてゐても、一人の子供を、子を棄てる數はあつても、身を棄てる數はない……私の妻として、久離切つて切れない静子であるのだから。いと静子よ！ お前の永遠の良人は僕なのだから——と私は聲をあげて叫び掛け、悲しみを哀訴し強調するのであつた。

この二つの文章を、私は漫然と並べたのではない。前者は、有名な『三十三間堂棟木由来』のお柳が風が持つて來るとう〜てう〜といふ木を切る斧の音のする中で、元の柳に歸る爲、愛兒縁九に離れがたない切々の情愛を纏繞とくどく場面である。後者は、『途上』の中で、主人公が生別離した先妻を思ひ、子を思ふ顧戀の情しのび難く、一種肅條たる松嶺の聲をききながら悲しみを翹へる處であ

「自我に動く人間の淺間しさから遁れたい」と人一倍強く感じる彼である。(括弧内は安倍能成氏への書簡)かういふ嘉村の反面は、彼が倫理家の素質を持つてゐる事をよく説明してゐる。然し、倫理家といふ事と、宗教家といふことは意味が異なる。宗教家には藝術を作る事は出来ない。チツドはこの事を「デモーンの協力なしに藝術は生れない」(ドステエフスキー論)と云つてゐる。嘉村は倫理觀に類敏な魂ではあるが、宗教家とはなれなかつた。前述したやうな書簡を書く彼が、數年後には、妻も子も、両親をも捨てて新しい女と東京へ出奔してゐるのである。この自己矛盾、自己撞着、——要するに、行爲する彼は、理念や理性から逸脱して、惡に荷擔するのである。この場合、倫理に敏感な魂が、懺悔と悔恨にも人一倍感じ安

る。かういふ誇張された感情と表現が一致して、一種の悲痛美をかもし出すのが、義太夫の『くどき』の世界である。次に嘉村と義太夫の關係だが、彼が小説の中で幾度かY町(現在は山口市)と書いてゐる山口市こそ、一説には、菓林子、近松門左衛門の郷國だと云はれてゐる。嘉村は義太夫に就いてはあまり語つてはゐないが、「うる覺えの淨瑠璃を節廻し面白う語つて」(途上)とか「淨瑠璃の觸りでもやつてゐるの」(秋立つまで)といふやうな處から想像するに、彼が義太夫に關心を持つたことは考へられる。

嘉村の故郷、即ち私の故郷では現在用ひてゐる言葉にも、義太夫的な上方風な雅言體が非常に多いのである。このことは、義太夫の義理人情の世界が、私の郷國人の生活に影響し、言語にまで及ぼした結果であるか、逆に、近松が私の國の生れであつたから、當然、彼の義太夫の中に私の郷國人の生活感情なり、言語が現はれたものであるか、私には非常に興味ある問題である。

私の故郷山口市は今だに義太夫の盛んな處で、特に私の一家には義太夫の愛好者が多い。祖父は義太夫の師匠まで養つて家産を傾けた人であつた。私は少年時代、祖父や父から近松の生國は山口市で、近松の姓が私と同姓の松村だといふやうなことで聞かされてゐた。母や私は、父の聲で、下手な世話物などを聞かされたものである。譬へ近松が山口市の生れでないとしても、私の一家の如き盲目的な信者がゐる以上、義太夫の庶民倫理が私の郷國人に影響して行つた経路は十分に頷けるのである。私はこの文章を書く爲に調べたのだが、近松の生國は未だに確證のない事が分つた。私は専門外で論ずる資格はないが、只、木谷蓬吟編輯の近松全集中に次の如き記述があることを傳へて置かう。

『戯曲小説通志』に據ると、近松は山口市吉敷郡山口市、父は松村八兵衛、幼名を藤四良と云つた。——とある。かういふ實録がある以上、私の祖父や父の、云ひ傳へもまんならでないといふたい處だが、却て、こんな記録があるだけに、私は牽強附會の妄誕だと思へないの

のは當然である。嘉村がこのやうな臆慮愛憎に心魂をゆすぶられる時『くどき』、『くどき』の表現をとるのは當然であらう。ここに嘉村の文學と義太夫の類似點を見るのである。

——私は柳の縁子が顔を詠めつ、とつおいつ、ようように氣を静め、オムそりよ、互に顔を見てゐては、身の上語るも面はゆし、……ノウ、我こそは柳の精、雨露の恵みに生ひ育ち、かやうに夫婦となることも、一方ならぬ因縁ぞや。先の生にて誓ひたる契りを結ばんその爲に、假に女の姿と變じ、柳が本に待受けて夫婦と成しも五とせの春や昔の春の頃……コレこの縁丸も、早や今年で五つ年の春秋の重なれば、乳がなくなつても育つべし、……チャ母は今を限りにて元の柳に歸るぞや。必ず草木成佛と回向を頼む良人よ子よ。はなれがたなや悲しやと、わつとばかりに泣き叫ぶ。——(三十三間堂)『三の切』より

——彼女は、此頃やうやう、新進作家として文壇の片隅に出てゐる私の、彼女と私との經緯を仕組んだ小説も或は必定讀

ある。

借て嘉村の小説に現はれる訛言が義太夫の世話物などの言葉と似てゐる點を、少し別な方面から考へてみたい。

山口市の全盛期は、なんと云つても、大内氏が中國に權勢を振るつた室町時代である。「大内氏は中國に雄視し、周防山口の繁榮は、京都に亞ぐ有様であつた」(荻野博士、日本史講話) 大内氏が支那貿易の勘合印を以て、直接大陸文化と交渉したのも、宣教師サビエルが山口町に來て、日本最初のキリスト教の教會を開いたのもこの時代である。大内氏は、南北朝合體にも功勞のあつた尊王の家柄で、風雅を愛し學藝を奨励してゐたから、應仁兵亂の後、京都の文化が一時潰滅に瀕したのを見るにしのびず、皇居をこの町に移し奉らうとさへした。従つて、暗世の代に兵燹を通れ、大内氏をたよつて、この町に落ちのびて來る公卿僧侶も多く、大内氏は、雪舟始め多くの文人學者達の Mekele の役を買つて出た譯であつた。「今でも、あちらの杜こちらの杜に、二條

とか、持明院とか、さうした宮人の墓が見出され、見事な築山の庭石などそちの巷路にころがつてゐて、大内氏の榮華の跡がたやすく偲ばれる」(「故郷に歸りゆくころ」と) 嘉村が書いてゐるのはこの事情である。近世では、馬琴が「美少年録」の中で「國豊かにして、民肥えたらば、京師の亂れに住みわびたる公卿、上達部の縉紳家も、この山口に移り住みて當ちん館に身を寄せ給ひ、……」と書いてゐる。

かういふ譯であるから、山口市が日本西端の山間の町でありながら、上方文化を未だに残してゐるのは當然で、訛言中に「買うて來う！」(神前結辯)「よう喉入りがした」(同)「仰しられた」(同)「少なうなつた」(同)「早うお戻り」(父の家)「この子はエライぞい！流石は男ぢや」(同)「やれ憐れいや」(同)「お客はどなたぢや？」(同)「お父うもお母あも」(同)「お止めなさんせ」(同)「去ぬるぞい」(父の家)「お二人様！お火はどさんすか。お寒うござんすけえ、お火をどつさり起しんさんせ」(父の家)「あんたはん、そや、キビ

スをこする石やつたに、まア、どうしようかいの！」(送止)「どうぞ、ご免んなさんせ。どうぞ、そればつかりは、それよ言ふて貰うちや、わたしや、生きとられんのい！」(牡丹雪)「殺すならわたしを殺さんせ。あの子に罪はないぢやの」(衆迎の怒)かういふ語形が、そのまま保存されてゐるのである。私には、言語學の知識もなし、室町期の京都の言葉との比較考證も出來ない譯だが、江戸中期、近松の世話物などの言葉によく似てゐる事だけは指摘出来る。

嘉村の『牡丹雪』の中に「けえど、久松さん、氣を落さんで下さんせ、良いお醫者様にかかつて保養すりや、屹度癒りますい、しつかりなさんせ。」といふ會話がある。これと近松半二の『野崎村』の段に出て來る臺詞、「お光様の縁を切らしたお憎しみ勘忍して下さんせ。アア、譯もないお染様。浮世離れた尼ぢやもの、そんな心も忽體ない、短氣起して下さんすな」あたりと比べると一層、興味がある。又、嘉村が「久松」といふ「野崎村」の主人公と同じ名前の主人公を『牡丹雪』

後記

* 謹んで新年の御祝詞申上げます。

* 御覽の通り新年號より本紙の形を改めました。内容の充實と共に號を追つて頁も殖して行きたいと存じます。何卒御聲援を御願ひいたします。

* 今般新社屋落成につき左記の場所に移轉いたしました。就きましては、昭和十五年十二月二十五日以後の郵便物は總て新番地宛に御願ひ致します。

* 舊臘發行の「西行研究録」(創元選書) 奥附廣告所載の近刊豫告、折口信夫博士著「日本文學の發生」とありますのは誤

記につき慎んで訂正致します。

* 北尾鏡之助著「新京都散歩」は古都京都に關して書かれた舊著「京都散歩」を新しく加筆改訂したものであります。挿入された氏の風物寫眞は既に定評あり、本文と俟つて、きながら古都に遊ばしむるの感あるものです。(價二・二〇)

* 今回、刊行される田中正平著「日本和聲の基礎」は我が樂壇に重大な寄與をするものと思ひます。著者は周知の如く音樂界の長老であり、世界の樂壇にもその名を知られて居ります。東西の音樂を學理的に研究することここに五十年、我が作曲界の不備、即ち現在我が國に行はれてゐる西洋式和聲樂の不振の素因を深く究明し、進んで純日本式和聲方式を案出提唱されたものであります。

や「父となる日」の中に登場させてゐるのは、偶然とは云ひながら、嘉村と義太夫を結びつける手がかりにはなると思ふ。私如きが兎や角云つても始まらないが、近松の生國の問題を提出したのも以上述べて來たやうに、山口市の傳統の中には、確に近松を生むだけの素地があつたといふ事を説明したいが爲である。その事が、ひいては嘉村の文學を、彼の郷土の文化に結びつけられると考へたからに他ならぬ。嘉村が、もし近松を直接に讀み、其處から彼の文學が影響されたのだとすれば、私の長々しい文章も意味がなくなつてしまふ。もし、さうだとすれば、彼が田山花袋を學び、葛西善藏を學んだといふ程度にしか重要性がなくなる。何故かと云へば、近松は(醫)山口市の生れであつたとしても、西鶴や芭蕉と同様、既に、郷土といふものからは超越した日本の古典作家だからである。嘉村の文學がローカルであるから個性的なのであつて、近松との結びつきも偶然な結合と見るべきであらう。その時、彼の文學も郷土といふものからは超越した存在となる。

謹賀新年

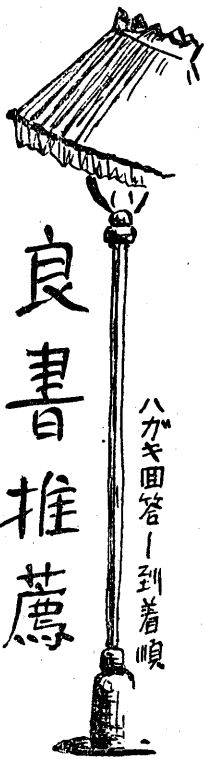
昭和十六年元旦

社長 矢部良策
社員 一同

株式 創元社

神田區三崎町二ノ四

日本大學西側(省線水道橋驛下車五分)
市電三崎町下車二分)



良書推薦

八カキ回答—到着唄

- 一、最近御讀みになつた良書。
- 二、その御感想。
- 三、今後どの様な出版を御望みですか。

三枝博音

- 一、富塚 清著
「科學日本の建設」(文藝春秋社)價二〇〇
インフェルト著 石橋榮譯
- 「物質の神秘」(創元社)價一八〇

二、日本の科學思想や科學論は、日本人の常識とか感覺といつたものから浮いてゐた。それがこの二三年生活の考へ方の改變から漸次事情がちがつて來はじめてゐた。富塚さんのこの本は、かやうにして科學觀が實質的にでき上るため

にまことによい助成となると思ふのです。
近頃になつて科學者が科學的眞理の狭い範圍に押し込められてゐるのを何とかして一般の知識人に開いて見せようとするやうになつた。そしてそれがかなり成功するやうになつた。インフェルトの著書はそのよい例である。この本は誰にもよくわかる。推稱したい本である。

關根秀雄

- 一、フランシスカルコ著 永田逸郎譯
「藝術放浪記」(青木書店)價一八〇
エラスムス著 池田薫譯
- 「愚神禮讚」(白水社)價一五〇
鈴木大拙著
- 「禪と日本文化」(岩波書店)價〇五〇

二、殊に「愚神禮讚」を面白く讀みました。かうした古典は、もつと一般の讀物として譯出されてよからうと思ふのです。日本や支那のものの中にも原文の忠實なパラフレーズとしてどなしに、寧ろ一般の讀物として讀むにたへるやうに、和譯され、現代語譯されて然るべきものがありはしないかと思ひます。

別所梅之助

- 一、良書か、どうか知らず。
林 語 堂著

「支那のユーモア」(岩波書店)價〇五〇
をおもしろく讀みました。才人の筆、輕妙です。「我が國土、我が國民」よりも私はよう御座いました。

坂田吉雄著

「町」(弘文堂)價〇五〇
いかにも大阪に住む人らしい書きぶり小さい本で便です。

「創元選書の柳田先生の著では「妹の力」がよう御座いました。

米山正夫

- 一、金剛 巖著
「能と能面」(弘文堂)價〇五〇

二、主題に對する研究が科學的であり、且つ藝術的感受到に於ても正確でしかも深遠、文章も立派で神經が行き届き、近頃の名著、藝術について思ひを秘める者の必讀の書。

三、自分の専門から、ロシアのすぐれた詩人を譯して欲しく思ふ、チュッチェフを初めブローク、エセーニンその他、但し譯者は誰が適任かと云はれれば、答へに因るが。

田中茂穂

一、良書は見付かりません。學鑑十一月號に緒方富雄「横組ペーチの擲圖の位置」を視て大に啓發されました。

二、この内容は私には餘りに甚だしくは氣付かなかつた爲め、大に利益しました。書物の編纂法に就いては種々の方面から我國の印刷法の進歩してゐないのを從來痛感してゐる爲であります。

三、大體三通りにしたいと思ひます。
(一)通俗物(小學卒業程度) (二)大學又は専門校卒業程度。(三)専門書。その内(一)と(三)に良書が少いと思ひ

ます。(一)は多少専門家の物したものが望ましい。(二)は大なるものでなく成るべく簡潔でありたい。(三)に就いて云ふべき事もあるが、後の機會に譲ります。

會津八一

一、私は現代の書物を讀まない方が、昨年からのうちでは、第一に齋藤茂吉氏の「萬葉秀歌」(岩波書店)價〇五〇に最も驚嘆もし敬服しました。古來冷かな穿鑿や參證で取扱はれて來た「萬葉集」を著者は焼けつくやうな熱情で解きほぐして、其眞髓を掴み出して萬人の眼前に指し示された。古今に獨歩する名著と云つてよい。初めて「萬葉集」に取りかかると先づこれからかかられるのがよからう。それから年來相當に「萬葉集」に修業の出來たつもりで居る人も一度は必ず讀んで見るべきである。

本田喜代治

- 一、ジョルジュ・デュアメル
渡邊一夫譯
「文學の宿命」(創元社)價一七〇
スタンダール 小林正譯
「綠の戀人」(河出書房)價一八〇

原田光子譯
「パレレフスキー自傳」(第一書房)價一八〇

二、何れも、たゞ翻譯のために翻譯したり賣れるから出版したといふものでなく、譯者が魂を打ち込んで仕事した跡が、はつきりと判ります。原書の内容

も、みな立派なものばかりです。

三、わたしとしては、日本、支那、印度の社會文化の闡明に資するやうな良書の新著並に復刻また翻譯を望みます。その際玉石混淆を十分戒心して、單に便乘的なものや、單に儲主義のものは避けるやうにして頂き度いと思ひます

河村只雄

一、黒板勝美著

「義經傳」(創元社) 價一・四〇

二、この「義經傳」ほど私はひきつけられてよんだ本はない。史實に忠實にして而も史的人物の面目を現代的に躍如たらしめしことに於て蓋し義經傳は最も特色あるものである。

鞍馬で修業した武人と伊豆で戰略の研究に専心した武人の人生觀の差異も亦よく描かれて居るやうに思つた。

三、私はこの義經傳の如くその専門の領域に特別な興味をもたぬ所謂専門外のものも知らず識らずの内にその専門の領域にひきつけて行く様な本を最も希望する。むづかしいことをむづかしい

説くのでなく、むづかしい内容を平易な而もひきつけられる様な表現で教へてくれるものが最も望ましい。それは「科學の大衆化」のためにのぞましきことである。

秋山謙藏

一、牧野伸顯著

1「松濤閑談」(創元社)

岸田國士著

2「從軍五十日」(創元社)

小林 元著

3「同」

島田雄吉編

4「河童の影法師」(俳畫堂) 價二・八〇

二、1、2、3では、アジアと日本の歴史を考へ、現實を考へる爲に、4では東洋の精神に徹した小川芋錢のあの境地を知る爲に。

三、偏狭な一面の獨善的なものでない國民的意欲の昂揚に資するもの。

河竹繁俊

一、田邊尚雄著

「日本音韻概説」(河出書房) 價一・二〇

二、啓蒙的である而も含蓄のある平易な書物。さうして手頃です。かういふ種類のものは各方面にわたつてほしいものです。

木下半治

一、外務省調査部編

「ナチス及ファシスの國家觀」

(日本國際協會發行)

二、最近必要あつてこの方面の書物を少し整理して讀んでみたが、本書は簡潔に纏まつてゐていゝ本である。但し若干の獨斷的な節もあるが。ナチスとかファシストとか口にする人はあるが、明確に把握してゐる人は少ないから、人々にはかゝる書物を讀む必要あり。

三、東亞と西歐とを統合し、その上に出づる指導的思想確立のための捨石となる書物(一足飛びにかゝる本が出るわけでないから)。

× × ×

佐藤信衛著

評論集

心と形

ここに集めた終々は哲學と科學とに造詣の深い著者が、現代の藝術一般について好悪の感裏まず披瀝したものである。好悪を分けるその基準の高さは今更いふまでも無い。キメの細かな柔軟な文章の靱さ、美しさは、いはゆる批評家の批評文の域を脱して、現代文の方向を示してゐる。理非と曲直とをわきまへ文化の明日を思ふ著者の言葉の光りは、本書を讀む者をしてそぞろに快哉を叫ばしめずには措かぬだらう。

定價 一・八〇

送料 〇・一四

新村 出著

日本の言葉

事にふれ物に當つて、言葉言葉のいはれを尋ねて見るとそこに意外な心理や人心の機微が窺はれて興深い。著者の驚くべき博識は、之等手近かな主題の中に、舶載文化の華やかさや醇雅な日本の心を見事に引き出してゐる。謂はば、語源叢談ともいふべき一書である。

内容

日本人と南洋(日本語に於ける南方要素管見)、天
平時代の國語、足利時代の言葉に就いて、うぶす
な考、こころ、愛といふ言葉、山言葉、とても補
考、外來洋語考、キセルの語源、語原雜話、馬鹿
考、歌舞伎名義考、其他十三篇。

創元 選書

定價 一・六〇

送料 〇・一四

エルネスト・ルナン
杉捷夫譯

幼年時代 青年時代

の思ひ出

神學に出發し、神學の立場に飽き足らず、遂に歴史學に新分野を開拓したルナンは、他方、近代フランスの三大文章家と謳はれてゐる。本書は、晩年の彼が、己が精神の歴史と魂の記録を綴つた名文である。流麗な譯文と相俟つてここに完譯がなつた。

定價 二・三〇
送料 〇・一四

アントン・チエーホフ
湯淺芳子譯

續妻への手紙

人は己れが愛する者に對してのみ眞實を語る。文豪チエーホフの、これは深い愛情に溢れた妻への手紙である。女優である妻の才能と價値を高く許價し、それを育てるべく、自我との相剋の中に努力しつゞけた彼の姿には、人間の苦惱が神々しいまでに溢れてゐる。

創元選書
定價 一・五〇
送料 〇・一四

島木健作著

或る作家の手記

著者の批判精神の厳しさに對して誰か畏敬を拂はぬものがあらう。又著者のこれを轉期として、更に新しき出をせむとする積極的な身構へに對し、誰か襟を正さざる者があらうか。本書こそ現代人の前に誇示すべき大力作にして、その倫理の探求と、發見と、表現とは、測々として我等に胸迫る眞に非常時向きの文學である。今日の文學を思ふ者、否日本を憂ふる者、誰か一讀滿腔の感謝を捧げずにおられようか。

定價 一・八〇
送料 〇・一四

嘉村儀多著

秋立つまで

逝いて既に八年。今や嘉村儀多の眞價は益々高まりつゝある。倫理と文體の一致、此處には確に本物の日本人がある。しかも讀者は長年の間、彼の作集に親しむ機會を失はれてゐた。故人をよく識る宇野浩二氏の長文の解説を附して代表作集を編む所以である。

内容 崖の下、父となる、足相觸、牡丹雪、秋立つまで、滑川畔にて、途上、來迎の姿、神前結婚、父の家、他六篇

創元選書
定價 一・七〇
送料 〇・一四

穎原退藏著

芭蕉・去來

俳聖芭蕉こそ日本の誇るべき詩人である。その詩魂のたくましさは、今日なほ國民文學として他の匹儔を許さぬ。彼の「正風」の跡を繼ぎ俳諧道を確立した者は、實にその弟子去來であつた。この度、俳文學の權威・穎原氏に依囑して、この偉大なる師弟の評傳を世に贈る。

創元選書
定價 一・四〇
送料 〇・一四

石濱純太郎著

富永仲基

從來、具眼の士によつて僅にその一部を語られた江戸中期の天才富永仲基の學問と生涯を體系的に述べた始めての書である。多年、仲基研究に傾倒された石濱氏に依つて傳へられた宜長に比すべきこの若き碩學は、古今を曠うし、儒佛神の三教に涉る學識を以て、獨り市井に誠の道を説いたのである。本書を讀まれる誰人もが、この天才の天折を深く悼むであらう。

創元選書
定價 一・二〇
送料 〇・一〇

昭和十五年度刊行圖書目録(1)

【單行本】

林 芙美子著 一人の生涯 價一・五〇	秋山謙藏著 歴史と現實 價二・〇〇
〃 心境と風格 〃〃	別所梅之助著 朝のおもひ 價一・八〇
〃 蜜 蜂 〃〃	島未健著作 滿洲紀行 價一・八〇
北尾録之助著 聖蹟大和 價一・六〇	林 房雄著 獄中記 價一・七〇
眞船 豊著 孤雁 價二・〇〇	會津八一著 鹿鳴集 價二・三〇
三好達治著 艸千里 價特三・〇〇	牧野伸顯著 松濤閑談 價一・七〇
オウ・ヘンリイ著 紐育物語 價一・五〇	藤澤桓夫譯 喜入虎太郎譯 支那の知性 價一・八〇
林語堂著 喜入虎太郎譯 支那の知性 價一・八〇	西川義方著 爐ばた 價二・〇〇

中山義秀著 清風颯々 價一・七〇

萩原朔太郎著 港に 價一・六〇	林 房雄著 西郷隆盛 各價一・七〇
湯澤三千男著 支那に在る思ふ 價一・三〇	小西茂也譯 バルザック 價一・八〇
アラン著 秋山謙藏著 歴史と環境 價二・三〇	林語堂著 生活の發見 (普及版) 價一・六〇
阪本 勝譯 渡邊一夫譯 文學の宿命 價一・七〇	北尾録之助著 若狭紀行 價二・三〇
北尾録之助著 新京都散歩 價二・二〇	千 宗守著 茶道妙境 價二・〇〇
ワトスン著 朝山新一譯 生 物 誌 價一・四〇	野村光一著 昔 樂名曲に聴く(上下) 價各三・〇〇
佐藤信衛著 評論集 價一・〇〇	ルナン 杉 捷夫譯 幼年時代青年時代の思ひ出 價二・三〇
島木健作者 或る作家の手記 價一・八〇	

【創元選書】

谷崎潤一郎著 陰翳禮讚 價一・三〇	志賀 勝著 ロレンス 價一・二〇
柳田國男著 孤猿隨筆 價一・二〇	バルザック著 宮崎嶺雄譯 谷間の百合 價一・五〇
三宅周太郎著 文樂の研究 價一・五〇	柳田國男著 雪國の春 價一・四〇
柳田國男著 風 帖 價一・〇〇	柳田國男著 海南小説(2) 價一・二〇
小林秀雄著 文 學 價一・二〇	柳田國男著 食物と心臓 價一・五〇
沼田頼輔著 紋章の研究 價一・五〇	柳田國男著 民謡覺書 價一・四〇
川田 順著 鴛 價一・三〇	テ 又著 英國文學史 價一・二〇
平岡 昇譯 薄田泣菫著 艸木蟲魚 價一・五〇	田中茂穂著 魚 價一・六〇
牧野信一著 心象風景 價一・三〇	

昭和十五年度刊行圖書目錄(一)

鳥羽正雄著 日本 の 城	價一・五〇
中谷宇吉郎著 日本 の 科學	價一・三〇
柳田國男著 妹 の 力	價一・六〇
谷崎潤一郎著 猫と庄造と	價一・六〇
ア・ラ・ン著 精神と情熱とに	價一・六〇
小林秀雄譯 關する八十一章	價一・四〇
西堀一三著 日本 茶道 史	價一・四〇
斎藤隆三著 近世 相史 概觀	價一・四〇
河竹繁俊著 河竹 默阿彌	價一・六〇
ウ・レリイ著 詩 について	價一・三〇
佐藤正彰譯 石濱純太郎著 永 仲 基	價一・二〇
川 順著 西行 研究 錄	價一・〇〇
チエホフ著 湯淺芳子譯 續妻への手紙	價一・五〇
伊東忠太著 法 隆 寺	價一・四〇
嘉村礪多著 秋立つまで	價一・七〇
△マキアヴェリ選集	價一・四〇
多智若菜著 第一卷 第二卷	價二・〇〇
第一卷 第二卷	價一・六〇
第二卷 第三卷	價一・六〇
第三卷 第四卷	價一・六〇
第四卷 第五卷	價一・六〇
第五卷 第六卷	價一・六〇
第六卷 第七卷	價一・六〇
第七卷 第八卷	價一・六〇
第八卷 第九卷	價一・六〇
第九卷 第十卷	價一・六〇
第十卷 第十一卷	價一・六〇
第十一卷 第十二卷	價一・六〇
第十二卷 第十三卷	價一・六〇
第十三卷 第十四卷	價一・六〇
第十四卷 第十五卷	價一・六〇
第十五卷 第十六卷	價一・六〇
第十六卷 第十七卷	價一・六〇
第十七卷 第十八卷	價一・六〇
第十八卷 第十九卷	價一・六〇
第十九卷 第二十卷	價一・六〇
第二十卷 第二十一卷	價一・六〇
第二十一卷 第二十二卷	價一・六〇
第二十二卷 第二十三卷	價一・六〇
第二十三卷 第二十四卷	價一・六〇
第二十四卷 第二十五卷	價一・六〇
第二十五卷 第二十六卷	價一・六〇
第二十六卷 第二十七卷	價一・六〇
第二十七卷 第二十八卷	價一・六〇
第二十八卷 第二十九卷	價一・六〇
第二十九卷 第三十卷	價一・六〇
第三十卷 第三十一卷	價一・六〇
第三十一卷 第三十二卷	價一・六〇
第三十二卷 第三十三卷	價一・六〇
第三十三卷 第三十四卷	價一・六〇
第三十四卷 第三十五卷	價一・六〇
第三十五卷 第三十六卷	價一・六〇
第三十六卷 第三十七卷	價一・六〇
第三十七卷 第三十八卷	價一・六〇
第三十八卷 第三十九卷	價一・六〇
第三十九卷 第四十卷	價一・六〇
第四十卷 第四十一卷	價一・六〇
第四十一卷 第四十二卷	價一・六〇
第四十二卷 第四十三卷	價一・六〇
第四十三卷 第四十四卷	價一・六〇
第四十四卷 第四十五卷	價一・六〇
第四十五卷 第四十六卷	價一・六〇
第四十六卷 第四十七卷	價一・六〇
第四十七卷 第四十八卷	價一・六〇
第四十八卷 第四十九卷	價一・六〇
第四十九卷 第五十卷	價一・六〇
第五十卷 第五十一卷	價一・六〇
第五十一卷 第五十二卷	價一・六〇
第五十二卷 第五十三卷	價一・六〇
第五十三卷 第五十四卷	價一・六〇
第五十四卷 第五十五卷	價一・六〇
第五十五卷 第五十六卷	價一・六〇
第五十六卷 第五十七卷	價一・六〇
第五十七卷 第五十八卷	價一・六〇
第五十八卷 第五十九卷	價一・六〇
第五十九卷 第六十卷	價一・六〇
第六十卷 第六十一卷	價一・六〇
第六十一卷 第六十二卷	價一・六〇
第六十二卷 第六十三卷	價一・六〇
第六十三卷 第六十四卷	價一・六〇
第六十四卷 第六十五卷	價一・六〇
第六十五卷 第六十六卷	價一・六〇
第六十六卷 第六十七卷	價一・六〇
第六十七卷 第六十八卷	價一・六〇
第六十八卷 第六十九卷	價一・六〇
第六十九卷 第七十卷	價一・六〇
第七十卷 第七十一卷	價一・六〇
第七十一卷 第七十二卷	價一・六〇
第七十二卷 第七十三卷	價一・六〇
第七十三卷 第七十四卷	價一・六〇
第七十四卷 第七十五卷	價一・六〇
第七十五卷 第七十六卷	價一・六〇
第七十六卷 第七十七卷	價一・六〇
第七十七卷 第七十八卷	價一・六〇
第七十八卷 第七十九卷	價一・六〇
第七十九卷 第八十卷	價一・六〇
第八十卷 第八十一卷	價一・六〇
第八十一卷 第八十二卷	價一・六〇
第八十二卷 第八十三卷	價一・六〇
第八十三卷 第八十四卷	價一・六〇
第八十四卷 第八十五卷	價一・六〇
第八十五卷 第八十六卷	價一・六〇
第八十六卷 第八十七卷	價一・六〇
第八十七卷 第八十八卷	價一・六〇
第八十八卷 第八十九卷	價一・六〇
第八十九卷 第九十卷	價一・六〇
第九十卷 第九十一卷	價一・六〇
第九十一卷 第九十二卷	價一・六〇
第九十二卷 第九十三卷	價一・六〇
第九十三卷 第九十四卷	價一・六〇
第九十四卷 第九十五卷	價一・六〇
第九十五卷 第九十六卷	價一・六〇
第九十六卷 第九十七卷	價一・六〇
第九十七卷 第九十八卷	價一・六〇
第九十八卷 第九十九卷	價一・六〇
第九十九卷 第一百卷	價一・六〇

△アジア問題講座(保存版)

全十二巻

各冊 價二・〇〇

△創元支那叢書

胡適著 適書 四十自述 價一・三〇

吉川幸次郎譯 四子 價一・三〇

豐子愷著 綠々堂隨筆 價一・三〇

周作人著 瓜豆集 價一・六〇

松枝茂大譯 雷賣りの董仙人 價一・三〇

吳守禮譯 雷賣りの董仙人 價一・三〇

平岡武夫譯 古史辨自序 價一・五〇

△創元社版 擴光利一集

時 計 價一・六〇 天 使 價一・五〇

春 園 價一・五〇 考へる葦 價一・五〇

家族會議 價一・八〇 短篇集 價一・五〇

△創元科學叢書

ハイベルグ著 古代 科學 價一・六〇

平山 寬譯 物質の神秘 價一・八〇

インフエルト著 石橋 榮譯 物質の神秘 價一・八〇

△創元社作曲理論叢書

小 松 清 近代和聲樂の 説明と應用 價七・五〇

月報「創元」第二卷第一號

昭和十五年十二月二十日印刷
昭和十六年一月一日發行

編輯兼 矢部良策

發行人 植田庄助

東京市芝區福町一ノ十三

東京市四谷區愛住町十九

發行所 株式 創元社

振替東京一五六五番

振替大阪五七〇九九番

電話四台八三八一番

電話新町六六〇三番

○御送金は切手又は振替を御利用願ひます。

○代金引換の御注文は勝手乍ら御斷り申します。

定價 一部五錢(送料共)